

[B年] 受難節第1主日(2023年2月26日)**【旧約聖書日課】申命記 6章10～19節**

10あなたの神、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに対して、あなたに与えると誓われた土地にあなたを導き入れ、あなたが自ら建てたのではない、大きな美しい町々、11自ら満たしたのではない、あらゆる財産で満ちた家、自ら掘ったのではない貯水池、自ら植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑を得、食べて満足するとき、12あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出された主を決して忘れないよう注意しなさい。13あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え、その御名によって誓いなさい。14他の神々、周辺諸国民の神々の後に従ってはならない。15あなたのただ中におられるあなたの神、主は熱情の神である。あなたの神、主の怒りがあなたに向かって燃え上がり、地の面から滅ぼされないようにしなさい。

16あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない。17あなたたちの神、主が命じられた戒めと定めと掟をよく守り、18主の目にかなう正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸いを得、主があなたの先祖に誓われた良い土地に入って、それを取り、19主が約束されたとおりに、あなたの前から敵をことごとく追い払うことができる。

【使徒書日課】**ローマの信徒への手紙 10章8～13節**

8では、何と言われているのだろうか。

「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」

これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。9口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。11聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。12ユダヤ人とギリシア人の区別

はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

【福音書日課】ルカによる福音書 4章1～13節

1さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を“霊”によって引き回され、2四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。3そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」4イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。5更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。6そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。7だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」8イエスはお答えになった。

「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」9そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。10というのは、こう書いてあるからだ。

『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる。』

11また、

『あなたの足が石に打ち当たることのないように、

天使たちは手であなたを支える。』」

12イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。

13悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 6章10～19節

10あなたの神、主が、あなたの父祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地にあなたを導き入れ、あなたが築いたのではない大きくてすばらしい町、11あなたが満ちたのではないあらゆる財産で満ちた家、あなたが掘ったのではない水溜め、あなたが植えたのではないぶどう畑やオリーブ畑を得て、食べて満足するとき、12エジプトの地、奴隷の家からあなたを導き出した主を忘れないように注意しなさい。13あなたの神、主を畏れ、主に仕え、その名によって誓いなさい。14他の神々、あなたの周りにいる民の神々に従ってはならない。15あなたの中におられる、あなたの神、主は妬む神である。あなたの神、主の怒りがあなたに向けて燃え上がり、あなたが地の面から滅ぼされることのないようにしなさい。

16あなたたちがマサで試したように、あなたがたの神、主を試してはならない。17あなたがたの神、主の戒めと、命じられた定めと掟を固く守り、18主の目に適う正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸せになり、主があなたの先祖に誓われた良い地に入り、これを所有して、19主が語られたとおり、すべての敵をあなたの前から追いつぶることができる。

ローマの信徒への手紙 10章8～13節

8では、何と言っているのでしょうか。

「言葉はあなたのすぐ近くにあり

あなたの口に、あなたの心にある。」

これは、私たちが宣べ伝えている信仰の言葉です。9口でイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです。11聖書にも、「主を信じる者は、誰も恥を受けず [別訳→失望する] ことがない」と書いてあります。12ユダヤ人とギリシア人の区別は

ありません。同じ主が、すべての人の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者は皆、救われる」のです。

ルカによる福音書 4章1～13節

1さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川から帰られた。そして、霊によって荒れ野に導かれ、2四十日間、悪魔から試みを受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。3そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるよう命じたらどうだ。」4イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。5さらに、悪魔はイエスを高く引き上げ [異本→高い山に連れて行き]、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せて、6こう言った。「この国々の一切の権力と栄華とを与えよう。それは私に任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。7だから、もし私を拝むなら、全部あなたのものになる。」8イエスはお答えになった。

「『あなたの神である主を拝み

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」9そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。10なぜなら、こう書いてあるからだ。

『神はあなたのために天使たちに命じてあなたを守らせる。』

11また、

『彼らはあなたを両手で支え

あなたの足が石に打ち当たらないようにする。』

12イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。

13悪魔はあらゆる試みを尽くして、時が来るまでイエスを離れた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月26日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。伝統的な教会暦は、「復活日(イースター)」の前に40日+6主日の「受難節(レント/四旬節)」の期節を設けてきた。他方、主イエスの十字架の受難を記念するときとして、「棕櫚の主日」から始まる「受難週(聖週間)」が「福音書」の伝える「受難物語」に基づいて初期教会以来、設けられていた。これに先行して、主イエスの「荒れ野の誘惑」の出来事を記念する40日の備えのときが設けられると、教会暦上は「受難節」として両者が一体的に記念されてきた。「受難節」の40日は、「復活前夜」に洗礼を受けようとする志願者の最後の備えの期間として位置づけられ、教会共同体もまた、洗礼を受けて新しく加わる者を迎える備えをするときとしての営みを整えるようになった。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、約束の地カナンへの入植の前にかつて荒れ野で過ごした四十年の出来事を想起させようとする一連の箇所の中から。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、信仰と信仰告白との表裏一体性を説く箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスの「荒れ野の誘惑」逸話伝承の箇所。

旧約日課(申命記6章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典「律法」の第五巻で、「出エジプト記」から始まった「モーセ物語」を完結させる書。エジプトから民を導き出し、シナイ契約に基づいて荒れ野の旅を民と共に重ねて来たモーセが、自らの死を前にして、これまでの歩みを振り返りながら神から授けられた「律法(トーラー)」の意義を再確認しつつ勧めを語るという形式で、主要部分は構成されている。「申命記」は、正典としての「律法」(「創世記」から「申命記」までの五巻)と「預言者」(「ヨシュア記」から「列王記」までの四巻、および「イザヤ書」から「十二小預言者」までの四巻)を神学的に結び付け基礎づける文書とみなされてきた。また、「列王記」下22~23章で描かれる南王国ヨシヤ王のもとでの改革の端緒となつたとされる「律法(王下22:8)」は、原「申命記」であつたろうと考えられてきた。

・日課箇所は、民が約束の地カナンに入植した際の心得を告げるものとして記されている。ここでもつばら強調されているのは、カナンの地で得るものがことごとく先住民の築いてきたものであるという事実に基づきながら、それをイスラエルの民に与えられるのは神であるという視点である。実際、「ヨシュア記」は、入植した民が先住民をことごとく滅ぼしたかのように描く箇所がある一方、イスラエルの民が先住民と共存していく様子も示しているし、「士師記」は、ほとんどイスラエルの民と先住民が混在しているとしか言いようのない状況を前提にしている。これらのことは、王国時代以前の「イスラエル」が、必ずしも一体的な民族的アイデン

ティティを有する集団であつたわけではなく、種々雑多な部族・民族の寄り合い所帯にすぎなかつたであろうことを示唆している。それでも、散在する部族・民族の中に、古い伝承(ヤコブ伝承、モーセ伝承など)を共有するものたちがあり、共通のルーツを持つ集団としての連携を保つことがなされていたことが否定されるわけではない。「申命記」自体は、王国時代を経て、それらの古い諸伝承が一つに統合された「ユダ・イスラエル史観」に立つた編集の手が加えられていると考えられる。

・17節の「戒め」は「ミツヴァ」、「定め」は「エダー」、「掟」は「コーケ」。これらは、「律法(トーラー)」の中で告げられる神の言葉の異なる性質の区別に用いられていると考えられる。他方で、このような類義語を三つ並べる例は、1節「戒めと掟と法(ミシュパト)」や20節「定めと掟と法」などもあり、厳密な三区分をしているとは言えない。なお、「シナイ契約」を物語る「出エジプト記」19~24章では、そこで神から与えられたものは「言葉(ダーバル)」と「法(ミシュパト)」の二つに区分けされている一方、同じ内容を繰り返す「申命記」5章では、「掟(コーケ)」と「法(ミシュパト)」の二つに区分けされている。

使徒書日課(ローマ10章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」で第一に扱われてきた書簡文書。パウロが未訪のローマの教会に宛てて著し、ローマ訪問計画の告知、その後のエスパニア伝道計画への協力の呼びかけ、また、ユダヤ人と異邦人の混成教会を基礎づける神学的論拠を論じる内容になっている。これは、パウロが「神学論文」として論じているという側面もあるが、むしろ、パウロがこれまでにすでにかかわりを持ってきた「ローマの教会共同体」に属する者たちとのかかわりの中で問われてきたことに対する応答として展開しているものと見るべきだろう。パウロは、エルサレムの「使徒たちの教会共同体」から派遣されていたバルナバに見出されてシリア・アンティオキアの教会共同体に属すようになり、バルナバと共に宣教活動に従事していたが、彼自身の入信の経緯からか、バルナバから離れて独自の宣教団を組織していた時期があつた。その時期に関わつた「コリントの教会共同体」創設に際して、パウロはユダヤ人夫妻アキラとプリスキラをはじめとする「ローマの教会共同体」に属する者たちと関わるようになり、調停的な立場を取るようになったと考えられる。しかし、コリントでの活動を通して、一部の「ローマの教会共同体」に属する者たちと対立するような事態になっていたことは確かで、その際に生じた行き違いやわだかまりを解消するためにも、パウロは、最終的に辿り着いた調停的な立場の神学的論拠を提示する必要があると考えたのであろう。

・日課箇所ではパウロは、イスラエルと異邦人が共通して救われる原理として、「神の言葉の宣教と、それに応じる信仰告白」という図式を提示している。

・9~10 節では、二つの事柄が順序を変えて繰り返されている。すなわち、「イエスは主である」と「口で公に言い表す(ホモロゲオ)」ことと、「神がイエスを死者の中から復活させられた」と「心で(エン・テュ・カルディア)信じる(ピステウオ)」ことである。「ホモロゲオ」は、発言の一致・一貫性を意味する動詞で、「告白」とも訳される。「ピステイス(信仰)」は、ここでわざわざ「心で」という修飾語が付されているように、それ自体としては必ずしも内面の心的あり方を意味せず、他者との関係性において「信頼」のおける、あるいは「誠実」な態度を意味する語。ローマの軍人文化では、「ピステイス」に相当するラテン語として「フィデス」が尊ばれていたとされるが、これは端的に上官の権威に絶対的に服することを指していた(主イエスと百人隊長の逸話を参照。ルカ 7:1~10 など)。

福音書日課(ルカ 4 章より)

・日課箇所は、主イエスの「荒れ野の誘惑」伝承逸話。共観福音書が共通して伝えているが、詳細な三つの誘惑の内容を伝えるのは、「マタイ」と「ルカ」のみ。「マタイ」と「ルカ」では、内容は共通するが、その構成順序に相違がある。いずれにしても、これらの「誘惑」に対する主イエスの応答は、もっぱら「申命記」(6 章または 8 章)からの引用によってなされている。

・この逸話内で「誘惑(を受ける)」または「試す」と訳される語は、いずれも同根語(「ペイラジ」「ペイラスモス」「エクペイラジ」)。

・この「誘惑」をもたらした存在を、「ルカ」はもっぱら「悪魔(ディアボロス)」として描くが、「マルコ」は「サタン」として、また「マタイ」は「悪魔」と「サタン」を混用して描いている。「マタイ」と「マルコ」では、「サタン」に対する退散命令をペトロに対して告げられた逸話を伝えているが(マタイ 16:23、マルコ 8:33)、「ルカ」では、異なる逸話でペトロに対するサタンの関りを描いている(ルカ 22:31)。

・この逸話の「四十日間」は、「モーセ物語」中の「荒れ野の四十年」と重ね合わせて解釈されるのが一般的で、福音書が引用する「申命記」も、そのような解釈に基づいての典拠提示である。一方で、「四十日間」は、「出エジプト記」が「シナイ契約」の逸話としてモーセのシナイ山に滞在した期間として提示している日数でもある(出 24:18、同 34:28)。

来週の誕生日 (2月26日~3月4日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-294 番「ひとよ、汝が罪の」(= II 99 番)は、16 世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンがルターの説教に影響されて作った詞で、原詞は 22 節で構成された受難物語を歌う詞だが、近年の讃美歌集には 1 節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525 年発行の詩編歌集に詩編 36 編のための曲として作曲。グライター

は、一時期プロテスタント教会に属し牧師職にも就いたが、後年カトリックに回帰した。

・21-284 番「荒れ野の中で」は、受難節の讃美歌として英米の讃美歌集で広く採用されている。作曲は、19 世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、フランシス・ポットが大幅に改作した詞が広く用いられている。

・21-453 番「何ひとつ持たないで」、現代オランダの元カトリック司祭で独立教会「エクレジア」を主宰する H.オースターハウスの作詞したオランダ語歌詞。曲は、カトリック司祭 B.M.ハウベルスがこの歌詞のために作曲。

21-294「ひとよ、汝が罪の」

O Mensch, bewein dein Sünde gross

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wollt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

21-284「荒れ野の中で」

Forty days and forty nights

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.

21--453「何ひとつ持たないで」

Ik sta voor U

1. Ik sta voor U in leegte en gemis, / vreemd is uw naam, onvindbaar zijn uw wegen. / Zijt Gij mijn God, sinds mensenheugenis, / dood is mijn lot, hebt Gij geen and're zegen? / Zijt Gij de God bij wie mijn toekomst is? / Heer, ik geloof, waarom staat Gij mij tegen?
2. Mijn dagen zijn door twijfel overmand, / ik ben gevangen in mijn onvermogen. / Hebt Gij mijn naam geschreven in uw hand, / zult Gij mij bergen in uw mededogen? / Mag ik nog levend wonen in uw land, / mag ik nog eenmaal zien met nieuwe ogen?
3. Spreekt Gij het woord dat mij vertroosting geeft / dat mij bevrijdt en opneemt in uw vrede. / Open die wereld die geen einde heeft, / wil alle liefde aan uw zoon besteden. / Wees Gij vandaag mijn brood zowaar Gij leeft. / Gij zijt toch zelf de ziel van mijn gebeden.